

あったのです。水害の多い地域の人々にとって、地域社会は運命を共にする生活共同体でもあり、それは日常の用排水管理など水利の面に及んでいます。

利根川沿いに多く分布

関宿地域の水塚は、中央に位置する台地と周囲に広がる低湿地に営まれている水田との境目に多く分布しています。

旧二川村の地域では利根川右岸に比較的多く、特に上流地域の東高野、新田戸、桐ヶ作、古布内に見られます。

一方、江戸川左岸では中戸、西高野、平井に数件のみ点在し、旧木間ヶ瀬村の地域では羽貫地区とメ切地区に見られるのみで、現在一部を除いてほとんど消滅しています。江戸川左岸に分布が少ないのは、河川改修にともなう移転が多かったことが理由であると思われます。

安全な高さは経験がもとに

宅地内における水塚は母屋の西側または北側に多く見られ、母屋の日照、通風

の妨げにならないこと、また、防風林的な機能を持たせるなどの理由があったとされています。普段は倉庫として利用されており、決して大きな広さを持たず、風呂や手洗いなどの設備も持ちません。

関宿に残る水塚は、過去の水害の経験によって家人の努力で安全な高さまで積み上げられていったものであり、その構造は大部分が土盛りによるものです。土は関東ローム層の粘土質の赤土で、水に対しては耐久性がよいものでした。

荒井律子さん（東高野在住）のお宅にある水塚も、明治時代初期から残るものです。ただし荒井家の水塚も「経年の降雨により徐々に泥となって流れ出てい

き、現在は当時よりだいぶ低くなっている」とのことでした。関宿の洪水の歴史の中でも「明治29（1896）年の洪水は激しく厳しいものだったようです」と語り、水塚にはその爪痕が残っています。

「台風が来ると川を見に行つて、危ないと思ったら家族で畳や長持ちを持って水塚に一生懸命運んだ記憶があります」と、子どものころの思い出を話してくれたのは、荒井家の近隣に住む片野弘子さん（東高野在住）。「水塚は、幼い時から普通に目にした風景です」と片野さんは

言います。

土手が整備され洪水の心配は減りましたが、博物館や研究者の方から「水塚をぜひ残していただくさい」

とされています。水塚を管理・保存することは大変ですが、「頑張れるうちは頑張ります」とほほ笑むお二人です。※水塚は個人所有のため、見学はできません。

資料協力：千葉県立関宿城博物館

参考資料：逆井芳男氏「関宿町における水塚の研究」

関宿町教育委員会発行「関宿町50年史」



関宿の水塚分布図
(平成9年1月現在)
資料：逆井芳男氏著
「関宿町における水塚の研究」



荒井家の水塚も母屋の北西側にあります



東高野地区で水塚を保存している荒井律子さん(右)と片野弘子さん(左)



▶「当時はこまで水が入りました」と水塚の羽目板の水人記録を指す荒井さん